

現代芸術におけるデジャヴとジャメヴ 発表要旨

平芳 幸浩（京都工芸繊維大学）

現代芸術は記憶とどのように関わろうとしているのであろうか。シンディ・シャーマン、森村泰昌、小川信治といったシミュレショニストの世代から、その後の世代に属するヴォルフガング・ティルマンスやアラヤー・ラートチャムルーンズックらの作品を取り上げながら、さらには映画『メメント』における記憶と表象の関係やアニメーション『新世紀エヴァンゲリオン』における使徒の造形の非一貫性の問題を通過しつつ、今日的な芸術におけるイメージと記憶の関係を、デジャヴ（＝既視感）とジャメヴ（＝未視感）を手掛かりに考えてみたい。

1980年代後半より、既成のイメージ群に編集／改変等の操作を加えて再利用した作品が数多く登場してくる。ジャーナリズムにおいて「シミュレーション・アート」とも呼称されたこのような動向は、イメージとして提示される視覚情報と我々の記憶との結びつきが、社会的／文化的／制度的枠組みの中で常に偏差を帯びたものとしてあることを暴きたてるとともに、記憶の制度性に揺さぶりをかけるものでもあった。さらに、「新しさ（＝記憶にないもの）」という近代的指標が崩壊した時代、膨大なデジャヴに覆われた現代においてイメージの可能性を問う試みでもあった。真に新しいイメージの創出という幻想を持ち得ない彼らは、集団的記憶を背景とするクリシェ化したイメージを操作することで、イメージをデジャヴとジャメヴの狭間に漂わせる。それによってイメージは裂開し、通常のシーケンス化された記憶との緊密な結びつきを失い、普段は想起されることのない抑圧された記憶へのアクセスを可能とする。

デジャヴとジャメヴを操作子とするシミュレーション・アート以降の世代における記憶の問題での特徴の一つは、記憶をコード化されたシーケンシャルなものとしてではなく、ランダムアクセス可能な情報集積体として捉えていることであろう。かつてシュルレアリストたちが夢や無意識として語ったような、現実的な意味の連鎖から解放された記憶の自由なネットワーク化こそが、今日改めて問われていると言ってもいい。それは現実離れした夢幻的な光景や空想を立ち上げるのではなく、情報によって整序された記憶から脱却することで立ち現れる現実を直視することである。そこに記憶と結びついた芸術の豊かさがあるのだ。